5歳児　実践事例

「経験を生かしながら，自分なりに作ることを楽しんだ事例」

男児3名　女児4名　計7名

1　クラスの実態（10月中旬から12月上旬）

- 年長児（7名），年中児（2名）ということもあり，共に少人数クラスである実情から，学年にとらわれずに関わり合いが生まれるように，7月からは，同じ保育室で生活をしている。
- 2学期，いろいろな行事に向かう生活の中で，友達と同じ目的をもつことにより，張り切って取り組む姿が見られた。
- 遊んでいて必要なものを思い付くと，製作コーナーにある素材や用具を使って作り，遊びに取り入れていた。
- 物心ついたときから，スマートフォンやタブレット端末が身近にある子が多く，何か分からないこと，調べたいことがあると「スマホで調べればいいよ。」「iPadを使おう。」とIT機器を使うことに慣れている子が多い。

2　教師の願い

- 文化祭や生活発表会（劇遊び）に向かう中で，必要なものを思い付き，自ら作ろうとする姿が見られるだろう。そのときに，本物らしくするためにはどうすればいいか，子ども同士で話をして自分なりに考えて遊びを進めてほしい。
- 本物らしく作ろうとするためには，それらについて調べようとする子もいるだろう。自分で調べる方法を知り，子どもたちだけで主体的に取り組んでほしい。

3　保育の実際

＜前日の姿＞

A男，B男，C子は，森で宝を探しているつもりで遊んでいた。段ボール箱で自分たちが住む隠れ家を作り終え，次に，森で狩りをするために鹿を段ボールで作ることに決め，教師に足りない分を用意するように話をして降園した。教師はいろいろな大きさの段ボール箱をたたんで製作コーナーの一角に置いておいた。

子どもの姿と教師の援助　　____：教師の援助	教師の援助の意図・考察
（10月18日） 登園後，自分たちの作った隠れ家でしばらく遊んだ後で，A男が「そうだ。今日は鹿を作るんだった。」とB男とC子に声を掛けた。B男が「先生，段ボール用意しておいてくれたかな。」と言ったので，①「いつものところに置いてあるよ。」と教師は答え，②別の遊びの場でA男たちの様子を見ていた。A男とB男は，製作コーナーの場からいくつかの段ボールを自分たちの遊んでいる隠れ家まで持ってきて，ガムテープを使って箱の状態し，組み合わせ始めた。その様子をC子は黙って見ていた。③教師はC子の近くに行って，「C子ちゃん，鹿って分かるかな。」と尋ねた。「なんとなく。」とC子が答えたので，「作れそうかな。」と再度尋ねると，「うーん。難しいかも。」と返事があった。そこで，④「それなら，鹿のこと分からないってA男くんたちに言った方がいいと思うよ。」と，声を掛けた。C子が，A男とB男に「ねえ。鹿のことよく分からないから教えて。」と声を掛けると，B男が言葉で説明し始めた。	①②　遊びに必要なものがどこに何が置いてあるのか分かるようになってきていたので，教師の援助は控えめにして子どもが必要感から動き出すのを待った。 ③　C子の様子から，鹿自体は分かるが，作り方のイメージが湧かず戸惑っているのではないかと考えた。

それでもＣ子が分からない様子でいると，Ａ男が「先生，iPad で鹿を見せて。」と言った。教師は，⑤「今，iPad 充電中なんだ。iPad はないけど，動物が載っている図鑑が，絵本の部屋にあったはずだな。」と返事をした。Ａ男とＢ男が絵本の部屋から図鑑を持ってくると，Ｃ子も鹿の載っているページを一緒になって見る姿があった。そして，「先生，鹿のしっぽって白いふわふわのところがあるんだね。」「鹿の角って，1 歳だと 1 本で 2 歳だと 2 本で 3 歳だと 3 本ってどんどん大きくなるんだって。」と図鑑に書いてあることをうれしそうに教師に知らせる姿があった。 （10 月 19 日） 鹿の体や頭を作り終えると，角の部分をどうするかで 3 人で話し合う姿が見られた。（Ａ男は 5 歳のオスを作りたいと主張し，Ｂ男とＣ子はメスを作りたいと主張したため，最終的に 2 体作った。）また，尻尾や耳の内側部分を「ふわふわにしたい。」というこだわりをもち，不織布，毛糸，綿などの素材を試して作っていた。 （11 月 30 日） 生活発表会の劇遊びに向け，登園した子から同じ役の子と必要なものを作っていた。Ｃ子はＤ子とリスの役になり，お面の製作をしていた。Ｄ子が先に作り終えると，教師に「リスに見えるかな。」とお面をかぶって見せに来た。教師は「うーん。⑥リスにも見えるけど，クマにも見えるかも。」と答えた。それを聞いていたＣ子が，「先生，動物の図鑑が見たいから，絵本の部屋に行って持ってくるね。」と自ら図鑑を取りに行った。そして，Ｄ子と一緒にリスのページを見始めた。Ｄ子は，「私はシマリスにしようかな。」と，お面に新たに茶色と白色の画用紙で模様をつけた。Ｃ子はじっくりと図鑑を見た後で，再び自分のお面を作り始めた。そして，出来上がると教師に「リスっぽくできたかな。」とうれしそうに見せた。縞模様が付いていなかったので，⑦「Ｃ子ちゃんは，Ｄ子ちゃんみたいに模様をつけないのかな。」と教師が尋ねると，「私のは，アメリカアカリスだから，模様がないの。」と笑って答えた。教師も図鑑を見て，⑧「本当だ。アメリカアカリスって，模様がないんだね。」と言うと，Ｃ子とＤ子は，顔を見合わせて「いろいろなリスだけど，お友達なんだよね。」「うん。」と笑い合った。	④　Ｃ子の性格から自ら困り感を伝えることはまだ難しいと考え，話すきっかけを作ると同時に困ったときの伝え方に気付いてほしいと考えた。 ⑤　iPad だと画像のみの情報になるが，図鑑だと鹿の生態などの情報にも気付けるのではと考え，声を掛けた。 ⑥　もう少し工夫してほしいと思い，⑥のように声を掛けることで，図鑑を持ってきてリスを調べるのではないかと考えた。 ⑦　Ｃ子にももう少し細部まで工夫してほしいと考えた。 ⑧　Ｃ子の気付きを認めることで，自分で考えたという気持ちを肯定し自信につながってほしいと考えた。

４　全体考察

○　年長児の 2 学期後半になると，今までの経験を思い出したり生かしたりしながら，園内の環境にあるものを使いこなす力が付いてくる。その力を付け，子どもが自ら考えて動き出せるように，園内のどこに何があり，どのように使うのかを知る機会をつくることが，もの・ことへの関わりが広がったり深まったりするための援助として大切だと考える。

○　ＩＴ機器が当たり前の子どもたちにとって，保育中でも何かを調べたいと思ったときにスマートフォンやタブレット端末を使うことを求める姿がある。図鑑に載ってないこともすぐに分かり，鮮明な画像を拡大して見ることで気付くこともあり，子どもの遊びの刺激として有効に活用していきたいと考える。

一方，図鑑は，見開きページの中にいろいろな情報があることで偶然，新しい知識を知り得ることができる。また，自分の気付きや好奇心によって見る箇所が変わり，自分で調べる面白さを知る機会にもなる。どちらかに偏るのではなく，「調べる」手段もいろいろあると知り，子どもが必要に応じて選べるようにしていくことが必要であると考える。